

東京日々新聞

千五拾五號



怪しく戸外に出ると思はる妻の氣絶す驚天匠と
呼ばるる葉と与へ抱き合はんと我は取りて内しと語り
夫より邪見の角折きて優き者とりしとを

さけびし心絶はて倒るる良人佐次郎
ゆめんと聞くと女は心消へしと声
女覚悟せし引く連

或時脊戸多
ふらふら衣とて居
よしと思はる黒雲舞下り大
調一声叱つて曰く不孝の
等閑あり

五逆の罪不孝あり大なるはと爰小安藝の國沼田郡楠木村の
木挽職佐次郎の妻容貌見事なりと心よけある化次と稱直
さんと佐次郎が父柳平の折く異見 □ かく遂に下り客と
あるとも馬車東風果は父も罵る
柳平呆て佐次郎に離別
の事よそしめしう艶
る色ふ心奪ふまふ
へ心よそしめし柳平
之の苦一病く重
さ枕は伏業の凝りあり
あり憂あやと種
の医療も驗

色と彼の女房
一滴の涙落さ
次却て喜び
其後母中病
ひよとる看
病あり

七
町人形
具足屋

一
萬
芳
幾



渡辺彫栄

